



言語の枠を超えて。 答えなき多文化共生の未来

平田 末季さん 北海道札幌市 北海道大学教育イノベーション機構／NPO法人SHAKE★HOKKAIDO 代表
Miki Hirata

日本の多文化共生を語る上で先住民族アイヌの人々を忘れてはならない。
同化政策を乗り越えてきた北海道で、平田さんは外国人定住者との共生社会の実現に向き合っている。

北海道大学で教壇に立つ平田末季さんは、JICA海外協力隊（JOCV）としてシリアとイエメンで日本語教育に携わった経験を持つ。帰国後は大学院を経て秋田大学に赴任し、現在は母校の教授として日本語教育をリードする。研究者としての王道を歩む中で、その根底には常に人と人との心の触れ合いを愛するJOCV経験者としての姿があった。

平田さんの現在地

楽しさで紡ぐ真の共生

「専門は言語学なので、研究室だけで仕事ができるからこそ、あえて外に出て、多様な人たちに向き合いたい」

目先の成果ではなく、長期的な視点で地域社会の日本語教育に貢献するこ

とに意義を見出す平田さん。数年で異動する行政職員と違い、安定的に地域に関われる大学教員だからこそその強みを活かす。

その平田さんが主宰するのが、「SHAKE★HOKKAIDO（シェイク北海道、以下SHAKE）」だ。深刻になりがちな外国人問題に楽しく関わって欲しいと、北海道らしく「シャケ（鮭）」と読める名を付けた。実際に、道内の協賛会社から実物の鮭が提供されたこともあるという。

SHAKEでは、2022年から「北海道地域日本語教育シンポジウム」を毎年開催。道内の日本語教育者が現状を語り合うスタイルで、住民も気軽に参加できる場を作ってきた。五年目の節目では、多文化共生に先住民の視点が抜け落ちていることに着目。北海道大学の日本

語教育のルーツがアイヌの人々への国語教育だった歴史を踏まえ、先住民研究センターの当事者を招いて問い直した。

2023年からは、札幌市内の劇団と連携した「演劇ワークショップ」にも取り組む。演者の日本語力は問わず、日本語話者と海外ルーツの住民が集まり、互いのエピソードから寸劇を作る。「言



シリアではアラビア語単語の音を利用したひらがなカードを日本語教員と一緒に作成した。



イエメンでは送別会で生徒たちがそれぞれお別れのメッセージを日本語で書いてくれた



北海道江別市にて外国人住民が市内での生活や仕事を紹介する会を定期的に開催。



技能実習生と地域住民が寸劇を見て地域の課題を知り、課題解決に向けた話し合いに臨む。

葉の壁がある中で意見をすり合わせ、合意形成していくプロセスそのものに共生のヒントがある」と、平田さんは演劇の持つ可能性に期待を寄せる。

国際交流を呼びかけると、集まる層は元々関心がある人に限定されてしまう。その点、SHAKEは、楽しさやエンタメの力でこれまで多文化共生の枠外にいた人々を巻き込んでいる。そこには「日本語教育を単なる言葉の学習や、文化の押し付けで終わらせたくない」という平田さんの強い意志が現れている。

JOCV時代

異文化で得た教える原点

2005年、平田さんは博士課程在学中にJOCVに参加した。最初はシリアのダマスカス大学に配属され、優秀で親日的なエリート学生たちに囲まれて教える楽しさを知った。しかし、任期終了間際、ポストが空いたとの理由でイエメンへ派遣が決まり、続けて厳格なイスラム社会に移ったことで、言語学習が持つ本来の重要性に気づく。

ある時、授業開始の一礼に対し「神

以外に頭を下げるべきではない」と激怒する学生がいた。緊張感の中、日本文化を知る学生がお辞儀の意味を説明してくれたことで、平田さんは初めて「言語を学ぶことは、自分の社会を別の目で見る『窓』を手に入れること」だと知った。

帰国後は博士課程に復帰。「経験がないと就職できないが、就職しないと経験が積めない」という矛盾がある日本語教師の世界で、JOCV経験はそのギャップを埋めてくれた。「JOCV時代の、毎日何が起こるか分からない、生身の人間とぶつかり合うあの感覚が忘れられない」研究職としてのキャリアの土台には、泥臭く活動したJOCV時代の経験がしっかり根付いている。

未来へのビジョン

豊かに交流できる未来へ

近年は家族帯同の定住外国人も増えている。その中には母語の識字経験が無く、さらにSNSの発達で、日本語を学ばずとも孤独を感じずに生活している人も少なくない。平田さんは、地域の日本語教室が日本人らしいマナー教育か

平田 未季さん プロフィール

北海道大学教授。専門は言語学・日本語教育。2005年、大学院博士課程在学中にJOCVとしてシリアとイエメンへ派遣される。帰国し博士号取得後、秋田大学赴任を経て同校へ。現在は留学生教育に携わる傍ら、任意団体を主宰し、地域における多文化共生の場づくりに従事している。

ら入る現状も踏まえ、これまでの日本語教育のあり方に疑問を呈する。

数年前、道内で特定の国の人々に対し大規模な誹謗中傷があり、日常的な交流がない危機感が浮き彫りになった。この時立ち上がったのが、日本の高校を経て大学へ進学した同国にルーツを持つ男子大学生。この事件が転機となり、平田さんはこれまでの「ゆるい活動」から一歩踏み出すことを決断。2026年4月、NPO法人SHAKEが誕生した。

「答えが見つからないからこそ、いろんな人と一緒に考えたい」平田さんの呼びかけに今、多くの賛同者が集まる。かつての自分のように「生身の人間と出会い、新しい価値を作りたい」と願う人々が、制約なく豊かに交流できる未来へ向かって、最前線を走り続けている。

平田さんへのエール！

イラストレーター・
グラフィックデザイナー
馬場 結子さん



柔らかい感性で紡ぐ、豊かな共生の輪

垣根を越えて人と繋がり、更に紡いでゆく平田さんの開けたマインドや、デザインや演劇といった芸術面を取り入れる柔らかさが、SHAKE★HOKKAIDOの豊かな活動に繋がっていると感じています。誰もが笑顔でゆるやかに交わる素敵な輪が、これからもっと地域や社会に広がりゆくこと、心から応援しています！